検証 *review*

バブル 日本が最も熱狂した時代

作家 田中康夫と ジャーナリスト 永野健二の 心象風景

正確にいえば、バブル期よりも少しだけ前の時代のことである。1981年、田中康夫の書いた『なんとなく、クリスタル』が世の中を騒然とさせた。

都心の高級レストランやアパレルブランド、米西海岸の音楽情報をちりばめ、その一つひとつに合計442もの注がつけられた。ただの説明ではなく、どこかふわっとした「毒」をまぶしているのが、この注の面白さだった。

ナイキのスニーカー＝「早い話が、ナイキ・ラインと呼ばれるライン入りのズックぐつです。」、レノマ＝「フランスのメーカー。スエードのバッグは、手あかが付きます。」

高級ブランド品に身を包んだ女性は「クリスタル族」と呼ばれた。そんな社会現象的なベストセラーが生まれた数年後、この国は「バブル経済」と名付けられる熱狂の渦に深く入り込むことになる。『なんクリ』のブームはバブルの予兆だったのだろうか。

田中は『なんクリ』を書いた80年代初頭を高度消費社会の幕開けの時期とみている。この時期の主役は二人。ダイエーの中内功は「量の拡大」を目指した。それが満たされてくると、今度は堤清二が「質の充実」というもう一つの視点を社会に与えるようになった。

田中はこう話す。「ひもじかったり、体がやせ衰えたりするからご飯を食べる。裸でいると寒くて危険だから服を着る。これは食べ物や洋服の第一義的な目的。でも、クローゼットにも冷蔵庫にもモノがあふれている。すると、次は好きなデザイナーとか雰囲気のよい食事とか、本来の目的とは離れたところに価値を見いだすようになる。これを僕はスタイリング化現象と呼んだ」。その現象を描いたのが『なんクリ』だった。

ある文芸評論家はこう評した。「青山通りを頭の空っぽなマネキン人形がブランド物をいっぱい下げて歩いているようなものだ」。

田中は反論する。「たとえば、シャネルという物質的ブランドと岩波新書という精神的ブランド。それらを同じ地平でとらえたうえで、その差異を議論すべきではないか」。時代に寄り添うリアルな感覚は、おそらく田中のほうにあったのだろう。だからこそ、『なんクリ』は社会現象にまでなったのだ。

ディスコで踊り明かす若者の姿はバブルの象徴だった

KPS

流通の巨人たちも消費者が見えなくなる

では、高度消費社会の先頭に立っていた二人、中内と堤に共通する思想は何だったのか。田中によれば、二人が共に語っていたのは、「配給は戦争の時代だ。流通という平和の時代を作らなければいけない」ということだった。

「欲しいときに、欲しいモノを、欲しいところで、欲しい人が、欲しいだけ手に入れられる社会の実現。消費者の希望に根差した思想だったはずだが、彼らも最後には『消費者が見えなくなった』と肩を落とした」

ソニーの「ウォークマン」が世に出たのが79年。当時、大学4年生の田中は東京・六本木の交差点でウォークマンを装着している人を初めて見た。一瞬、その姿に度肝を抜かれたが、今もずっと目に焼き付いているのは、その人の誇らしげな表情だ。それはその数年後に携帯電話を初めて使いだす人にも共通するものだった。

「自分の居場所を確認しにくい、社会の歯車化を誰もが感じていた。

でも、ウォークマンをつけて街を歩くと、ディレクターからインカムで指示を受けているのに自分が仕切っていると錯覚する、スタジオのスタッフと同じ優越感に浸れた」

しかし、そうして生まれた高度消費社会は後にバブルという異物を生み落とす。日本人には、量の拡大から本格的に質の充実へ転換するための準備ができていなかった。

「暗記型教育のせいなのか、WhyやHowを自律的に考えて動かぬまま、高度消費社会を迎えてしまった」と田中は話す。次に訪れるバブルは異才を放った二人の経営者をも容赦なくのみ込むことになるのである。

田中は『なんクリ』の最後の注に当時の厚生省がまとめた合計特殊出生率と高齢化率の将来予測を記した。衝撃的な少子高齢化予測で、日本の消費社会が成り立たなくなるように感じたためだが、その注に着目したのは、ワシントン・ポストやフィガロなど海外メディア数社だけだった。

2014年に発売された『33年後のなんとなく、クリスタル』では現在の予測を記した。それに比べれば、当時衝撃を受けた予測はまだ楽観的だった。日本にいつまでも熱狂が戻ってこなかったのは、バブルの後遺症だけが理由ではなかった。その答えがここに出ている。

ウォークマンをつけると「居場所」が見つかった

作家 田中康夫

たなか・やすお●1956年生まれ。『なんとなく、クリスタル』で文芸賞受賞。長野県知事、参議院議員、衆議院議員を歴任。

撮影：尾形文繁

100万部を超えるベストセラー『なんとなく、クリスタル』と、2014年発売の『33年後のなんとなく、クリスタル』

30年後だからこそバブルを語りたい

それでもこの国には今、これまでの30年とはちょっと違う空気が流れているようにも感じる。ジャーナリスト・永野健二もそう考える一人だ。

永野の書いた『バブル 日本迷走の原点』。都心のオフィス街では多くのビジネスマンがこの本を買い求めている。永野がこの本を書いた動機はこうだ。「昔話になるぎりぎりのところだけれど、バブル時代を語ることが今必要だと強く感じた」。

バブルが生じた80年代後半から30年が経過した。「企業の寿命は30年」と説いたのは、永野も昔率いた経済誌だった。永野によれば、一流企業でも成長が加速する場面と一息つく場面が30年周期で訪れる。バブルを語るうえでも、30年後というのはよいタイミングだった。

バブル論を展開するうえで象徴的なのは、金融政策とその後の不良債権処理である。「それはそうなのだが、違う側面もあったと思う。たとえば銀行は最後にはみっともない形になってしまうのだが、その過程では、追い詰められながらもビジネスチャンスや企業成長の機会を探っていた。結果として、土地の高騰というバブルを生み出していくんだ」。

実は70年代に戦後の経済システムはピークを迎えていたと永野はみている。八幡製鉄と富士製鉄が合併し、新日本製鉄が生まれたのが70年。三光汽船によるジャパンライン株の買い占め事件が表面化したのが71年。その陰で動いていたのが日本興業銀行だった。経済システムの中心にいた銀行である。

この二つの出来事を境に経済システムはピークアウトした。亀裂が走りだしたシステムを、官僚と護送船団の銀行が手と手を取り合って修繕していた。システムを守り抜くため

に使ったのが土地だった。

87年10月のブラックマンデー。NYダウ平均株価は前日比で500ドル超も下落した。当時の日本株への衝撃は少なかったが、永野の感覚では違っていたようだ。

「銀行ぐるみで支えていた土地バブルが背景にあったから、日本の経済システムそのものが大きく揺らぐ調整がそのうちやってくると思っていた。これは本当に壊れるなあという感覚だよね」

狂気の引き締めは日本を変えたのか

興銀の時価総額は8兆円、野村証券は5兆円。世界的な金融機関である米シティバンクの時価総額は1兆円だった。「その絵で見ると、いかに異常な状態なのかがわかった」。日経平均株価は89年末、4万円に迫る史上最高値をつけた。証券関係者の誰もが「来年もすごい上昇相場になる」と信じて疑わなかったが、株価はそれを最後に奈落の底へ落ちることになる。

89年に日本銀行総裁に就任した三重野康の使命はバブル退治だった。就任直後から急激な金融引き締めに踏み切る。永野の言葉を借りれば「狂気の引き締め」である。株式や土地の価値が暴落し、証券会社や銀行が瞬く間に淘汰された。「失われた20年」の始まりだった。

「三重野さんがあの狂気の金融政策を打ち出さなければ、もう少しもったのかもしれない。銀行を中心にした土地本位制の終焉、さらに日本型経済システムの終焉は避けられない道だったはずだが、本当はもう少し別の道もあったのかもしれない。それは俺にもよくわからないんだ」

失われた20年の原因の半分はバブル崩壊、もう半分は経済・金融政策のまずさだという。政府や日銀はおそらく半値くらいまでの調整でランディングさせようと思っていたはずだが、そのもくろみをはるかに超えて、株式と土地はほぼ壊滅的ともいえる打撃を受けた。

日本人にとってバブルの歴史が重要な意味を持つのは、それが「第2の敗戦だからだ」と永野は考える。

ブラックマンデーのころ「壊れる」感覚があった

ジャーナリスト 永野健二

ながの・けんじ●1949年生まれ。日本経済新聞社で証券部記者、編集委員として活躍。「日経ビジネス」や日経MJの編集長を歴任。

撮影：梅谷秀司

『バブル 日本迷走の原点』は若いビジネスマンにも読まれている

第2次世界大戦で日本の政治・軍事の仕組みが終焉を迎えた。その後に生まれたのが、一党支配体制の自民党と興銀が主導した経済システムである。それは70年代に事実上のピークに達した後、バブル崩壊によって最後を迎える。

それでもバブルは大小さまざまに形を変えながら、何度も世の中に現れるのである。確かに80年代のような熱狂はないが、「資本主義の仕組みが何となくバブル的なものに覆われてきた」というのが永野の感覚だ。トランプ政権の誕生後、上昇を続けた株価、過去最高レベルへ膨張する金融機関の不動産融資額……。それは「兆し」とみるべきなのだろうか。

はっきりした根拠を持っているのではないが、そんな空気を敏感に感じ取っている人たちが増えているのだろう。永野はこう話す。「みんなあの時代のことを知る必要性を強く感じているんだと思う」。

30年前の日々へのノスタルジーに触れた後は、やけに生暖かい今の空気の本質を正確に読める気がする。

（敬称略、本誌・堀川美行）

日本経済の現在地

バブルの総括からポピュリズムまで

仮想通貨の裏側

新規制スタートでも守られぬ個人

明治28年11月14日第3種郵便物認可
第6718号 2017年4月8日発行
毎週土曜日発行（4月3日発売）
ISSN0918-5755

Weekly Toyo Keizai
週刊東洋経済
2017 4/8
定価690円

1テーマ5分でわかる

伊藤元重
「デフレ脱却の準備は整った」

田中康夫／永野健二
「バブルとは何だったのか」

落合陽一／井上智洋
「AIと共存できる仕事・できない仕事」

親子で学ぶ経済入門

図解でよくわかる世界情勢

トランプ米国の迷走／中国バブルの行方
欧州極右の暴風

停滞する日本株 先行きどう読む？

糸井重里が語る「ほぼ日」上場の秘密

週刊東洋経済
2017 4/8

CONTENTS

表紙から

日本経済に米トランプ政権、欧州ポピュリズム旋風…。親子で学ぶ日本と世界の「今」。

アフロ

28 【第1特集】

1テーマ5分でわかる

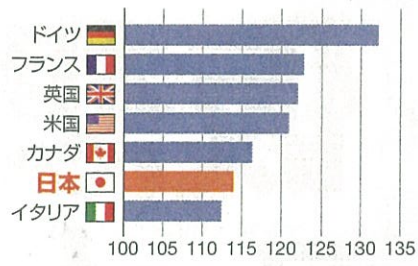
親子で学ぶ経済入門

30 Part1 日本経済の読み方
|図解| "世界"と"時代"で比較 日本経済の立ち位置
32 特別講義 デフレ脱却の道筋が見えた
34 トランプ勝利でなぜ円安が進んだか
36 2%物価上昇が必要な理由
INTERVIEW
38 日本人はなぜモノを買わなくなったのか 藤野英人●レオス・キャピタルワークス社長
40 広がる格差を是正できるか 井手英策●慶応義塾大学教授
41 労働力不足はどのくらい深刻なの? 安藤至大●日本大学准教授
42 長時間労働はなくなるのか 永野 仁●明治大学教授
43 年金制度に残された課題とは? 玉木伸介●大妻女子大学短期大学部教授
44 トランプ相場に変調 日本株には期待薄?
48 検証 バブル 日本が最も熱狂した時代
作家田中康夫とジャーナリスト永野健二の心象風景
51 グローバル化の反動で「バブル」に脚光

52 Part2 産業・企業動向を知る
日産ゴーン改革は日本的経営を変えたか
56 自動運転はいつ実用化されるの?
58 僕たちがAIと幸せに暮らす方法
筑波大学助教・メディアアーティスト 落合陽一 vs. 駒沢大学経済学部専任講師 井上智洋
62 糸井さん、どうしてほぼ日は上場したの?

64 Part3 世界情勢の読み方
|図解| 台風の目はトランプ 欧州でポピュリズム拡大?
66 特別講義 世界中に広がるポピュリズムを解明しよう
68 第一線の専門家が分析! トランプ政権70日
70 懸念だらけの中国経済 不動産バブルが崩壊?
72 選挙イヤーの欧州で極右政権は誕生する?

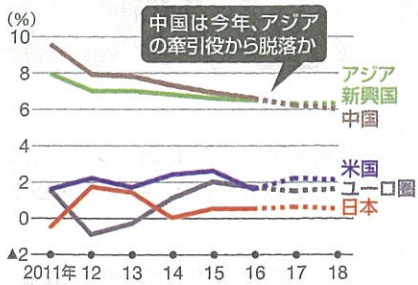
■ 先進国の中でも成長力は低い
—10年間での名目GDP成長率—
(→P30)



32

伊藤元重
学習院大学教授
「日本は先駆的にAIを活用していける」

49

田中康夫
作家
「ウォークマンをつけると"居場所"が見つかった」

■ 中国の成長率が鈍化
—各国の経済成長率—
(→P65)